

「この人 59」

三橋 真砂子 67歳 神奈川県

編集部 俳句を始められたのは？

三 橋 三十代の頃、職場の俳人でもあった人事課長さんに勧められました。

編集部 滑稽俳句を始められたきっかけは？

三 橋 横浜の八木会長の俳句教室で「こっけいの粉」をかけられて、すっかりハマっております。

編集部 滑稽俳句の魅力とは？

三 橋 秀句に会うたびに、身体中で大笑いできる場所ですね。

編集部 俳句における「滑稽」とは？

三 橋 ユーモア＋ウイット＋意外性＋悲哀、それらを上品な皮で包んだもの。例えば、漫画の「サザエさん」などはぴったりかなと思います。

編集部 滑稽俳句を続けていて良かったことは？

三 橋 重くもない自分の脳みそを、ありったけ使うので呆けてるヒマがないところです。

編集部 滑稽俳句を作るコツは何でしょうか。

三 橋 うーん、夢の「滑稽俳句大賞」をとれました暁には、顔を上げてコツを大いに語りますわ。

<代表句>

眠る山頭を踏みて富士拌む

のど仏無防備にしてラムネ飲む

国道を乗とつてゐる葛の蔓

大花火音の落ち来る通夜の席

任期終へし夫と車窓の青田かな